

Back Number

本論文は

# 世界経済評論 2022年9/10月号

(2022年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

## 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

## スメドリー・バトラーの「戦争は詐欺」



佐藤 紘彰

『戦争は詐欺だ』(War Is a Racket)と書いたスメドリー・バトラー(Smedley Butler)というアメリカの軍人がいた。このことを思い出させたのは、去る5月20日、New York Times紙がハイチに関わる一連の記事を掲載したからだ。

### ハイチの遅れ

はて、ハイチでは最近そんな記事を必要とする事件があったのかな?と見てみると、記事は4人の記者の合作で、うちCatherine Porterが2010年1月のハイチ大地震で現地に行った時、同国の経済発展の遅れに驚いたのが発端だという。

確かに、ハイチの立ち遅れは明らかである。サイズでは九州の3/4ながら、同じHispaniola島を東に分かつドミニカ共和国と比べると、ドミニカは地下鉄が走り、健康保険も公立学校も揃っており、避暑地は栄え、それ相当の経済成長を見せている。これに対し、ハイチの学校は大半が私立学校でべらぼうな費用がかかる。そのため年齢が増えるとともに「学校で勉強をしたことがない」人たちが増える。

国連統計によると、ドミニカ共和国の65歳以上の人たちの識字率は2006年80%に対しハイチは同年8.5%と低い。また、2020年ドミニカ共和国の個人所得は7,268ドル・世界96位に対し、ハイチは1,360ドルで178位だった。ハイチの首都Port-du-Princeの面する湾には汚物が浮かぶ。

### フランスによる「身代金」

普通、ハイチの遅れの理由としては、アメリカがその「裏庭」でやった横暴の一つとして同国を1915年から1934年まで占領したこと、また第二次大戦のあとのハイチ自身の失政が挙げられる。ほくにも独裁者Papa Docやその息子Baby Docがすぐ頭に浮かぶ。しかしタイムズ紙はそれに先

立つものがあったという。19世紀の初めのフランスによるハイチの強奪だった。

ハイチはフランスの植民地だった1791年、黒人奴隷が反乱、ナポレオンが送った大軍を打破して独立を宣言、奴隷制を廃した。時に1804年、近代史ではこれに類する例がない誇るべき建国だった。しかも英国が奴隷制を禁じた1833年、アメリカが奴隷制反対から内乱(南北戦争)が起こった1861年に大きく先立つ。

ところが、1825年、フランスはハイチ再征服のため大艦隊を送って脅し、ハイチは再度の戦争を避けてフランスの要求した膨大な賠償金(reparations)を呑んだ。フランスは加害側への弁償を強要したのだ。アメリカでは、ここ長らく、先祖が奴隷だった黒人に対する賠償の成否が論じられているが、その逆になる。ハイチはその点でも歴史上最初かつ唯一の国になったという。

しかも、この賠償金は最初の支払い額だけで同国の歳入の数倍だった。このためハイチ政府は支払いと同時に借入が必要になった。これは「二重負債」と呼ばれたが、賠償金がフランスの銀行を潤したとすれば、借入をしたのもフランスの銀行だった。この二重負債は20世紀初めまで何世代に及んだ。

その巨大な「身代金」の結果の一つとして1870年代から(第一次)世界戦争勃発までの「良き時代」(Belle Époque)をフランスにもたらし、1889年のパリの世界博覧会のためのエッフェル塔の建設を可能にした。そこで大きな役割を果たしたのがCrédit Industriel et Commercialだった。

### Citibankの前の銀行

そしてアメリカによる占領。タイムズ紙はこの占領を始めるのに、1914年末のある日、アメリ

カ海兵隊8名がPort-du-Princeの国立銀行に白昼堂々と入って、金塊5万ドルを持ち出し、そのまま湾に停泊する砲艦に持ち込んだ。数日後、金塊はウォール・ストリートの銀行National City Bank（今のCitibank）に納まった、云々。

この部分にスメドリー・バトラーが「ハイチの米軍の指導者」として出てくる。1917年、アメリカはハイチの議会に新憲法を作って外国人による土地の所有を認めるよう命じた時、ハイチ議会がこれを拒絶すると、バトラーは部下の海兵隊を引き連れて議会に乗り込み議会を解散。そして新憲法を押しつけた。時に海軍次官だったFDRは後にその憲法は私が書いたと誇らしく述べたという。

### 職業軍人

バトラーは米西戦争中17歳で海兵隊に入り、少尉からmajor generalまですべての階級を務めた生粋の職業軍人だった。これをほくが冒頭で「軍人」としたのは、major generalは現在「少将」とされるが、当時の海兵隊では最高階級だったからだ。

1931年退官。講演依頼が多くなり、その中で軍人として自分が果たした役割を反省し始めたらしい。まずかなりのにほる講演料の大半をペンシルベニアの失業者救済基金に寄付した。大恐慌は始まっていた。

翌年ペンシルベニア州で上院議員に立候補、特に第一次大戦に従軍した人たちの多くが失業していたこともあり、その「ボーナス」を強く支持した。これがその年の夏「ボーナス軍」のワシントン「露営」となり、バトラーはその人達を支援して話して回った。その鎮圧に当たったのが時の陸軍参謀長ダグラス・マッカーサーだった。

『戦争は詐欺だ』を出したのは1935年。ほくはその題に惹かれて買ったことがある。手に入ると小冊子で、今はインターネットで読める。内容は「戦争は詐欺だ」「誰が利益をあげるのか」「誰がつけを払うのか」「この詐欺を打ち壊す方法」

「戦争糞食らえ！」という5つの章から成る。各章に述べることは多い講演のさわりを選んだようだ。

二、三拾うと、第1章「戦争は詐欺だ」からでは、「戦争は詐欺であり、常にそうだった。おそらく歴史で一番古い詐欺であり、もっとも利益が高く、明らかに一番悪意に満ちる。また唯一の国際的スコープを持つ。利益がドル（金）で数えられ、損失が人命で数えられる唯一のものである」。

第2章「誰が利益をあげるのか」では、「（第一次）世界大戦の我が国の参加は短かったが、米国には約520億ドルかかった。その費用は1935年ですら、国民一人当たり400ドルの負い目となっている。普通の企業の利益率は6~12%だが、軍需企業のそれは20~1,800%に及ぶ。しかも、これを愛国主義のためと正当化する」、云々。

### 資本主義のヤクザ

1935年末、バトラーはCommon Sense誌に「アメリカの軍隊：平時」と題する記事を寄稿、そこで自分の軍人としての役をこう述べた。

「私は33年と4カ月間、職業軍人として、我が国でも最も敏捷な軍隊（即ち海兵隊）で勤め、その大半をビッグ・ビジネス、ウォール・ストリート、及び銀行家のために高級力士として費やした。つまり、私は詐欺師であり、資本主義のためのヤクザだった（…）／私は1914年、アメリカの石油権益のためにメキシコ、なかんずくタンピコ港を安全なものとし（…）1916年にはアメリカの砂糖権益のためにドミニカ共和国に光をもたらし、1903年にホンジュラスをアメリカの果物会社が簡単に利用できるようにした。1927年には中国でスタンダード石油が邪魔をされないで自由に動けるようにした」。

『戦争は詐欺だ』が「戦争糞食らえ！」で終わる理由が分かる。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在NY